



九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.203

2012(平成24)年12月1日(土)発行

○「はらまち九条の会」の結成は2005(平成17)年12月7日ですから、今年で満7年です。「戦争放棄」の憲法第9条を護り、「戦争をしない国・日本」をめざします。○年会費千円。会員は全国各地に426名。事故の原発に“世界一”近く活動可能な「九条の会」です。○全国のどなたでも会員に。あなたもどうぞ入会を!

地震・津波・原発事故・風評被害など、大震災の縮図の南相馬市 被災地南相馬市の現状を知っていただくために...



▲11月3日、原町区錦町の立看板前で「子どもの本・九条の会」の面々。全国でご活躍の著名な児童文学者、代表丘修三、きどのりこ、二宮小夜子、長谷川和子、西山利佳、茂手木千晶、はやの志保、濱野京子、一色悦子の皆様。



▲11月7日、「たかつ九条の会」の皆様、挨拶と南相馬の現状を話す平田慶肇会長。

六月に続き二回目の訪問。七日は無人の飯館村を、放射線量を測定しながら通過。津波で多くの犠牲者を出した鹿島区のみちのく鹿島球場や鳥崎地区、原町区の渋佐地区とがれ

き高山、警戒区域だった小高区の倒壊家屋、村上海岸を視察した。JR小高駅前の自転車置き場に今も放置されている数百台の自転車をみて「高校生はどうしているのだろうか」と涙する参加者が多かった。



鳥崎地区を視察した、たかつ九条の会員

「福島の子どもたち」とともに川崎市民の会」の高橋真知子代表も参加した。今夏に二回、福島の子どもたちを市青少年の家に三泊四日で招待したのに続き「一月にも企画したい」と話した。山崎さんは「多くの人に震災・原発事故の縮図の南相馬市を見てもらい、風評などをなくしたい」と話している。

八日は二本松市の男女共生センターで、浪江町津島地区からの避難者五人と懇談した。避難の様子、牛の養育、親の急死、劣悪な仮設住宅、先の見えない生活の苦しさ聞いた。同市郭内の仮設住宅を訪問、支援物資を手渡した。

▲11月17日付『福島民報』浜通り版より。「たかつ九条の会」会員の南相馬市訪問の様子。

■南相馬市民で他都道府県に避難している人々や出身者が、全国各地の避難先で、大勢の人々に避難や被災の様子、南相馬市の現状をお話しています。■またく上記のように、全国の訪問希望者を南相馬市に案内して、被災の現地に直接立っていただき、被災民の声を聞き、地震や津波や原発事故の悲惨な状況に触れ、復興があまり進んでいないことなどを理解していただくことも、様々な形で行われています。■それらは市民の自発的な活動ですが、やがて行政を動かすような大きな力になればいいと思います。

「子どもの本・九条の会」九名・神奈川県川崎市「たかつ九条の会」二〇名が南相馬市を訪問
○震災関連死者が全国最大、津波犠牲者も県内市町村で最大、さらに原発事故に苦悩し、震災の縮図の南相馬市ですが、関東地方の二つの「九条の会」会員が被災の様子を見学され、本会とも交流をもちました。

浜通りの被災地を視察 川崎のたかつ九条の会員

たかつ九条の会(川崎市高津区)の山本武彦会長ら二十人は七、八の両日、南相馬市などを視察した。南相馬市のはらまち九条の会(平田啓肇会長)の事務局長で川崎市に避難している山崎健一さんが案内した。

六月に続き二回目の訪問。七日は無人の飯館村を、放射線量を測定しながら通過。津波で多くの犠牲者を出した鹿島区のみちのく鹿島球場や鳥崎地区、原町区の渋佐地区とがれ

き高山、警戒区域だった小高区の倒壊家屋、村上海岸を視察した。JR小高駅前の自転車置き場に今も放置されている数百台の自転車をみて「高校生はどうしているのだろうか」と涙する参加者が多かった。

「福島の子どもたち」とともに川崎市民の会」の高橋真知子代表も参加した。今夏に二回、福島の子どもたちを市青少年の家に三泊四日で招待したのに続き「一月にも企画したい」と話した。山崎さんは「多くの人に震災・原発事故の縮図の南相馬市を見てもらい、風評などをなくしたい」と話している。



若松丈太郎さん。原発事故の影響で不通となったJR常磐線の踏切近くに立つ＝福島県南相馬市

メディア時評



若松 丈太郎

詩人
(福島県南相馬市在住)

私は東京電力福島第一原発の北25kmにある自宅で暮らしている。昨年3月の「核災」(核による災害)発生から4日後、私たち夫婦は自主避難し、35日後の4月19日、避難先の福島市から帰宅した。自分の「場」で暮らしたかったことに加え、75km北西の福島市より南相馬市の放射線量が低かったからである。ほどなく「緊急時避難準備区域」に指定された自宅一帯は、5カ月後の昨年9月30日、指定が解除された。

住民の不安に心え続けてほしい

だが、解除後も、多くの住民の不安は消えていない。住民が最も知りたいのは、福島第一原発がどんな状態にあり、作業が順調に進んでいるのかということだ。

毎日新聞9月11日朝刊特集「東日本大震災から一年半」はそれに応えた。それによると、福島第一原発1〜3号機から、

現在も1時間あたり最大約1000万粒の放射性物質が放出されているとみられるという。作業員が近づけない場所があり、炉心冷却で生じる汚染水の増加も廃炉作業を妨げている。格納容器内の溶融燃料をすべて回収し廃炉となるまで30〜40年を要するという。核災は「終息」していないのだ。

その後も、トラブルや作業事故が相次いでいる。9月22日、3号機の使用済み燃料プールに約470kgの鉄管が落下、10月2日には第一原発敷地内で、汚染水処理による高濃度放射性廃棄物から発生する水素ガスの排

気用ポンプから白煙が出た。11月2日には第一原発内で電源ケーブルが誤って切断され、窒素供給装置が一時停止した。

東日本大震災後、福島県や近隣県では体感地震が頻発している。11月3日朝にも、福島県沖を震源とする地震で震度4を観測した。揺れが収まり、まず脳裏に浮かんだのは、福島第一原発に異常がないかということだ。「情報不足」の下、人々は「また避難を強いられるのでは」と不安を抱えながら暮らしている。

福島第一原発3号機で78年に臨界事故とみられるトラブルが起きていたことが、29年後の07年に発覚した。それを機に、私は08年、「みなみ風吹く日」と題した詩で、東電の事故隠しとごまかしの体質を告発した。

「気の遠くなる時間が視える／世界の音は絶え／すべて世は／世界の音は絶え／来るべきこともなし／あるいは／来るべきものをわれわれは視ているか」

だが、その後も東電の体質は改まらず、「核災」は起こってしまった。住民の不信感はさらに深まった。

福島第一原発のどんなささいなトラブルも、近隣住民には命にかかわる情報なのだ。漏れなく報じ続けてほしい。それらの情報があれば、住民は推測し、判断し、行動につなげられる。(東京本社発行紙面を基に論評)

チェルノブイリ訪問から、詩「神隠しされた街」を発表

若松丈太郎さん(本会会員・南相馬市原町区在住)は、四十年前前から詩や評論で、原発の危険性を警告されてきました。チェルノブイリ原発事故から八年後の一九九四年五月、ウクライナの現地を訪問。帰国後、強制疎開のプリピャチ市の惨状を、詩「神隠しされた街」として発表。それから十七年後、昨年の東日本大震災が起き、福島第一原発事故後、原発事故の責任追及と避難民や子どもたちの惨状を全国に訴えておられます。

▲上写真は、十一月十九日付「朝日新聞」全国版「ニッポン人脈記」より。
若松丈太郎さんが数十年來、原発の危険性を警告してきたことを詳しく紹介しています。

▲11月19日付『毎日新聞』全国版。「メディア時評」はこれが第2回で、第1回が10月9日、第3回は12月31日、第4回は新年1月28日に掲載予定。

<若松丈太郎さんの著作> ○『福島原発難民』コールサック社¥1,500 ○『ひとのあかし』清流出版¥1,700
<12月の新刊> ○『福島核災棄民』コールサック社¥1,890 (加藤登紀子が歌う「神隠しされた街」CD付き)